
トワインクル～輝ける空に～

ゆぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トウインクル～輝ける空に～

【著者名】

Z5958A

【作者略名】

ゆぐ

【あらすじ】

そう、僕は変わった。いや、変わってしまったんだ。それでも、僕は信じてる。輝ける未来があることを。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

プロローグ

「プロローグ」
キーンゴーンカーンゴーン…。

「よし、今日はここまでだ。各自復習を忘れないよう」「…」

先生の無遠慮な声が僕の耳をつんざく。

授業が終わった。嫌な嫌な、休み時間が始まる。

「おい、星川！今日は人数がたらねえから、一緒に野球やろうぜー。」突如、大柄な少年が、一人ただ座っている少年に話しかけた。

「ええ！？いいよ…、僕は…。」

少年は力なく答えた。

「ちっ！ノリの悪いやつだな。入学して1ヶ月がたつて、いうのにまだ慣れねえのかよ。おい！行こうぜ！」

大柄な少年は、捨て言葉を吐きながら取り巻きを引き連れて教室を出て行つた。

はあ…なんでだろう。なんでこんな僕になっちゃつたんだろう。小学校のころに戻りたいよ…。

ずっと、あこがれてた中学生。こんなはずじゃなかつたのに…。

プロローグ（後書き）

プロローグなので、特に無しです。第一話へどうぞ。

第一話 お母さんとハンバーグ（前書き）

ええ、1話目ですね。今日次に続き2作目でも、あります。これは友人からの依頼の作品なんですが、なかなかですよ

第一話 お母さんとハンバーグ

（第1章 僕と母とハンバーグ）

ざわめきの残る学校を後にした僕は、一人早い下校途中だ。本当なら、楽しみにしていた部活動をしていたはずなのに……。僕の中学校生活は、あの口から決まっていたのかもしれない。

「ただいま。」

もちろん、「お帰り、遼ちゃん」などは帰つてこない。

紹介が遅れたけど、僕は星川 遼（ほしかわ りょう）。今年から中学に入学した。

家族は、お父さんと一人暮らし。お母さんは、僕が、小学校のころに亡くなつた。

病気だつた。お母さんは小さいころから、病弱だつたらしい。でも中学校生活はとても楽しかつたそうで、死ぬ前には中学校の友達を呼び続けていたそうだ。これは僕のおばあちゃんから聞いた話。僕のおばあちゃんは隣町に住んでいる。それに時折、遼ちゃんと呼ぶのだ。確かに息子である、僕の名前を呼ぶのは不思議ではないが、なにか違う感じがしたそうだ。

僕は冷蔵庫をあけ、適当な飲み物を出してからいすに座つた。リモコンをいじりながらテレビを見る。それでもこんな時間から面白い番組はやつていなかつた。

「4時30分か・・・。」

いろいろなサスペンスはやつているものの、途中から見たつて分かりやしない。

僕は、ゴクッと牛乳を飲んでから、自分の部屋に向かつた。

部屋を空けると、日光が目に入ってきた。

「ん…んん。」

何をしようか迷つたが、お父さんが帰つてくるまでまだ時間があるので寝ることにした。

いつもは、宿題を済ませたり、本を読んだりするのだが、今日はやけに眠かった。

ベッドに入ると、一分もしないうちに深い睡魔が襲つてきて、自然にまぶたは閉じていった。

「遼！帰つたぞー。」

！ 突然の声に目が覚めた。 時計を見ると時半をさしていた。

お父さんが帰つてきた。

「お帰りなさい。」

眠そうな目をこすりながら、僕は玄関に向かつて歩いていった。

「おお、悪かつたな。起こしたか、でももうご飯にするからテーブルに座つてなさい。父さん、着替えてくるから。」

お父さんは、そういう残すと自分の部屋に消えていった。僕はお父さんに言われたとおり、居間に向かいテーブルに座つた。

すると、3分もしないうちに、お父さんがやつってきた。

「今日は、何弁当？」

「今日は、ハンバーグ弁当だ。遼、好きだろ？？」

！

「食べたくない…。」

僕は答えた。お父さんは気づいてくれる。そつ、信じた。

「え…！？」

お父さんはいかにも意表を突かれたという感じで、睡然としている。それに更に腹が立つた。

「僕が、僕が、お母さんの作ったハンバーグしか食べないことを忘れたの…？」

僕はつい怒鳴ってしまった。

「あ……ごめん! 忘れてたんだよ。お父さん、疲れて……。ほら、じゃあ今から買いに行こう? 何でも買ってやるから。遼の食べたいやつな」

「ひと時でもお母さんのこと忘れたの?」

もづこのときの僕に自我はなかつた。必死に弁解する父親が許せなかつた。

僕は、必死になだめようとする父親を置いて、自分の部屋に向かつた。

「おー、待て! 遼!」

お父さんも怒つていらしかつた。

そりやそうだ、仕事で疲れて帰つてきて息子のために買つてきた弁当を『食べたくない』だもんな……。自分が悪いのは分かつていた。今まで、育てもりつたことは感謝してる。でも、今回のは許せなかつた。

そんなことを考へている間に、僕は自分の部屋に着いた。そして、一目散にベッドに飛び込んだ。

「お母さん。」

ふと、お母さんの作つてくれたハンバーグを思い出した。裕福ではないうちで、時々出てくるハンバーグ……。

「遼ちゃんには大きいのをね……。」

そういうて、いつも大きいのを僕にくれた。

そんなことを考へると、何故か涙が、あふれてきた。きっと、学校での出来事もあって、無性に悲しくなつたのだ。う。

「ううう……お母さん……。つづわあ……」

それでも、大声で泣くのはお父さんがいるのでもずいと想い、枕にしがみつきながら、一人、静かに泣いた。

気がつくと、朝だった。どうやら、そのまま眠つてしまつたらしい。

居間に向かうと、お父さんからこんな、メモがあつた。

「遼へ 昨日は『じめんな』。お父さん、遼の気持ち何も分かつてやれなかつた。

ほんとに『じめんな』。お父さん、あれから反省した。もうハンバーグ弁当なんて買わないよ。

朝ごはんは冷蔵庫にあるから、あつためて食べててくれ。 父

分かつてる。悪いのは僕なんだ。。『じめんな』お父さん。

それでも、「ハンバーグ弁当なんて買わないよ」の文には少し笑えた。

「そういうじやないだろ？…。」

そのあと、僕は朝食を済ませ、制服に着替え、玄関で靴を履いていた。

いつも、このときになると、気分が落ち込む。それでも今日は晴れやかだった。

「さてと…。」

玄関の鍵を閉めると僕は、学校に向かった。

なにかいいことありそうな予感がある。なぜか心が踊った。

第一話 転校生（前書き）

第一話になりました。

今回は、文脈も丁寧に日常の何気ない話から発展させてこきたいと
思っています。

第一話 転校生

「おはよう！」

後ろから、大きな声がしたので思わず振り向いた。

「なんだ…。静香か…。」

「なんだってなによー、せつかく挨拶してゐるのにーー。」

ウサギが噛み付くように、この女が言った。

彼女は、花井 静香。

僕の近所に住んでる、いわゆる幼馴染といつやつだ。

いつも元気でテンションが高く、顔も可愛いので男の子からも人気がある。

クラスは別々になつたが、 家が近いのでこいつやって時々会つんだ。

「ねえ、学校は楽しい？」

「えつ？」

ふいに、質問が飛んだので僕はあせつてしまつた。

「うん。楽しいよ。毎日学校に行くのが楽しみ。」

嘘をついた。いや、つかざるを得なかつた。

だつて、彼女の前であんなこと…言えるはずもなかつた。

「それなら、嬉しいな。私もね、毎日が楽しくて！」

太陽のようにまぶしい笑顔で話す天使に、僕の胸は針が刺さつたようにならなかった。

あの後僕は、学校まで彼女と行って、その後、昇降口で別れた。クラスが別々だからも、理由であつたが、彼女が僕と学校に行つてゐるなんて知れたら、彼女に迷惑がかかるに違ひない、そう思ったのだ。

「じゃあここで。」

「え…、あ、うん。またね。」

そう話す彼女の顔は悲しそうにも見えたが、別に気にしなかった。彼女と別れて歩いた廊下は、太陽をなくしたように冷え切っていた。

キーン、「ーンカーンカーン…。

チャイムと同時に先生があわただしい様子で入ってきた。

「おはよう、みんなーさつそくだが、今日はいい知らせがある。」

そういうと先生は、廊下に向かつて手招きした。

「ささり…おいで」

すると、可愛いセーラー服を着た子が、緊張した面持ちで入ってきた。

「今日から、君たちの仲間になる三波 良子さんだーお父さんの仕事の都合で、わが中学校へ転向してきた。みんな、仲良くしてあげなさい!」

中学校にもなつてそんな説明は要らないだろ…と、思った。でもおかしいな。普通、転校生なら入学式の日にこればいいのに…。

「席は…、そうだな。星川の隣が空いてるな。わわわ、あの空いている席だ。」

先生は優しい口調で促した。

「えー、星川の隣かよー。」

「可愛そうよー。」

そんな罵声が飛んでいたがもはや僕には気にならなかつた。良子と名乗るその女性が、僕の近くまでやつてきて軽く微笑んだからだ。

近くで見ると、本当に可愛い。なにか懐かしい印象も受けた。母性本能をくすぐるというか…。

ガタツ！

席に着いたとき、僕の心の音符はだからシまで高鳴つた。でも、ただ興奮しているというわけではない。なにかを感じさせてくれる女性だった。

しかし、その思いも一瞬のものだつた。

ホームルームが終わると、男子、女子関係なくみんなが良子さんのところに来たからだ。

そして、いろいろな質問を浴びせている。良子さんも困ったような顔をしながらも、丁寧に返答していた。そのおかげで僕も周りのやつらからちょっかいに出されることもなかつた。

その日は一日がものすごく早く感じた。
とにかく、早く感じたのだ。

気がつくと、下校途中だつた。

「あら、遼じやない？」

聞きなれた声だ。

「おつ、静香か。」

声のトーンが高い、さすがにこれはまずいと思つた。

「とにかく、幸せそうね。そんなに転校生が来たのが嬉しいの？」

鋭い声で問い合わせられ、僕はたじろいだ。

「つるさいな…。関係ないだろ。それより部活はどうしたんだよ？」

話を転換する作戦だ、これはわれながらよい作戦だと思つた。

「ああ、今日は休みなの。あんたこそ、部活は？」

「僕も休みなんだよ。」

「野球部練習してたわよ？」

「自主休暇！」

僕は思わず大きい声を出してしまつた。話を変えるつもりが逆に痛いところを突かれてしまった。

「あらそつ…でもサボってばっかりじゃダメよ。先輩厳しいみたいだから。」

「分かつてゐよ…」

僕はそういう残すと、その場を去つていつた。

「バカだな…、なんで言い争いになっちゃうんだろ…。なんで、も

う少し優しくしてあげられないのかな…。一番辛いのはあいつなのに…。」

静香が、ゆっくりと呟いた。

「ただいまっ！」

僕はそう怒鳴るなり、玄関の戸を開けてかばんを放り投げた。
そして、一旦散に自分の部屋に向かつた。

「ちえ…、せつかくいい気分だったのに台無しだよ…。人の事情に
首突つ込むなよ…。でもあいつ…僕のこと心配してくれてるんだろ
うな。ちょっと、言い過ぎちゃったかな。」

そう後悔した。そんな後悔で昨日のお父さんに対する行為もよみが
えってきた。そして、一つの提案を思いついた。

お父さんの為に、ハンバーグを作つてあげよう！

自分でも意外な提案だつた。あんなに昨日までハンバーグの事で怒
つてたのに…。ないたことで吹つ切れたのかもしれない。もう甘え
てはダメなんだ。そう、考えた。

早速、本棚から料理に関する本を出した。お母さんが使つていたや
つだ。今も大事にしまつたある。本を出したときにかすかにお母さ
んの香りがして、また涙がこぼれそうになつたが、さつき甘えてち
やだめつて決めたばっかりじゃん。と、考えて持ち直した。
幸い、材料はそろつっていた。早速、本を見ながら始めた。

作り始めて30分がたとしたら、2つ分のハンバーグが出来
た。後はこれを焼くだけだ。

こう見えて、お父さんと2人暮らしになつてからは度々、夕飯を作つていたのでそれなりに料理は出来た。なので、ハンバーグもなかなかの出来だと自負した。

お父さんが帰つて来るまではまだ時間があるので、帰つて来る直前に焼こうと思つた。

焼きたてのぼうがおいしいと思つたからだ。

お父さんの喜ぶ顔見たいなー・昨日のことは誤りなくやや！
そう思つていた。

第三話 お弁当（前書き）

第三話です。相変わらず、更新遅いですね。

第三話 お弁当

「そうだ！明日の弁当に小さいのを作つておこう！」

なかなか、いい提案だ思った。今までがうまく作れたので、調子に乗つたのもしれない。

慣れた手際で、小さいのを1個、2個作つていった。

田も西に傾きかけ、鮮やかな夕焼けが遼の家を包んだ。そうこうしているうちに、お父さんの帰つてくる時間になつていた。

「やつばい！焼き始めないと、お父さん帰つてきちゃう！」

僕は再び本を開き、温度、時間等を確認した。そして、先程作った二つの大きな宝石をフライパンに乗せた。

「よ～っし！」

僕の胸は高鳴った。

ジュー…。火をかけ始めたとき、玄関から声が聞こえた。

「ただいまー。」

お父さんだ！

スタッ…スタッ…。

足音が聞こえる度、緊張が大きくなる。

そして…、ドアが開いた。

「あっ、お父さん！お帰りなさい。今ね、ハンバーグ作つてるんだ！食べてくれるよね？」

先手を打つた。

「遼…、もちろんだ！そつか、遼が作つたのか！嬉しいな！」

父は驚きつつも、嬉しそうな顔をした。

「もう少しで、焼き上がるから着替えてきて。」

「おひー！」

お父さんが部屋に向かうのを確認してから、胸を撫で下ろした。

「ふう。」

「さて…、頂きます！」

お父さんはそう行って、口に入れた。

「どうかな？」

ドキドキしながら、聞いてみる。

「うん…、うん…、おいしいよ！母さんと今までいかないが、すごく似た味だ！さすが親子だな！」

「ほんと…？よかったですー。」

僕はお母さんと同じ味を田舎にして作っていたので、とても嬉しかった。

その後、二人はあつといつまに夕飯を平らげた。

翌朝、僕はお弁当にハンバーグを詰めていた。

「んしょ…、んしょ。」

入るだけ、いた。

「あつ！もう、こんな時間だ！」

お弁当に一生懸命になりすぎて、時間のことなどすっかり忘れていた。

「いってきまーす！」

僕は鍵を閉めて家を後にした。

今日一日はみんなもあまり良子さんは近づかず、数人の子としゃべっていた。

時々見せる笑顔に僕の胸は赤く染まる。

「ねえ…遼く、くん？私、今日ね、教科書忘れたの。見せてくれない？」

いきなりの問いかけに僕は驚いたが、喜んでOKした。
(言つまでもないことだが…。)

「ありがとう…。」

遠慮気に話す彼女の顔は、なんとも可憐だった。

4時限目の授業も終わりに近づいたころだつた。
「ねえ、今日一緒に屋上でお弁当食べない?
え
? 僕に言つてるの?いや、そんなはずは…。
「あ、ゴメン! いきなり迷惑だよね…。遼くん…。」

遼くん? リョウクン? 僕の名前は?

星川 遼。

僕のこと?

今僕は、屋上に向かう階段を登つてている。
隣には、良子さんが。

現実味が沸いてこないが、一緒にお弁当を食べることになつたらし
い。

僕たちの学校では、お昼時間の間屋上を開放し、そこで弁当を食べ
てもいいことになつていて。

屋上は広いが、そんなにたくさん的人は来ない。
要するに一人きりだ…。

今、そのドアを開けた。

太陽に日差しが眩しい。風はほとんど吹いていなかつた。
やつぱり、人はたくさんいない…。

「あのへんで食べようよ!」

僕が大体の位置を決めた。

「うん!」

僕たちは、手ごろなベンチに座りそれぞれの弁当箱を開けようとし

ている。

「そういうえ…ハンバーグ入れてたんだ。今頃、思い出した。
ぱかり…」

良子さんのお弁当は、鮮やかだった。色もきれいで、おいしそうだ。

「…、おいしそうな、ハンバーグだね。1個もらつてもいい?」

「いいよ!僕が作つたんだ!」

皿邊づに話した。そのとき、良子さんの顔がほころんだ。

「ほんとに…!?嬉しい…」

ぱくりと食べると、良子さんは満面の笑みを浮かべた。

「おいしい!遼くんつて料理上手なんだね。」

「そ、そ…うかな。喜んでくれると僕も嬉しい…!」

照れ氣味に話した。

その後は、いろいろな話に花を咲かせたのだが、ついにあの話になつた。

「遼君つて、何部に入つているの?」

「え…?あの…野球部。」

少したじろいながら答えた。今は練習に行つてないからだ。

「へえー、すごい格好いいね!ポジションはどこ?」

目を輝かせながら聞いてくる良子さんに僕はうそをつけなかつた。そして、なにより彼女には何の話をしても大丈夫だというような妙な安心感があつた。

「実は…今は練習に行つてないんだ…。その…先輩からいじめられて…。」

彼女は驚いた顔をした、そして優しい声で聞いた。

「あ、ゴメンね。辛いこと聞いちやつて…。もしかして、それでクラスの人にも…。」

? ?

知つていた?確かに知つてもおかしくはない。

でも、なんで僕がクラスでも浮いていることを知つていて弁当に誘うのだろう?

でも僕は平常心だった。

「 そうだよ。先輩の権力は強いから…。みんなして、僕を…。」「 でもなんでなの? なにをしたの?」

僕は逃げられないと思った。でも、やっぱり妙な気持ちだった。
嫌われてもいい…、疎外されてもいい…、それでも…

全てを話したかった…。僕の悩みを聞いてほしかった…。

第四話 想いそれぞれ（前書き）

大変遅れました。
申し訳ございません。

第四話 想いそれぞれ

「僕の……、話を聞いてくれる?」

僕はささやくように聞いた。

「もちろんよ、何でも話してみて。」

彼女の穏やかな笑顔に僕は決心した。

ふと、風がやさしく吹いた

あれは、僕が入部してすぐだった。

そう、部長が1年生の実力を見たいからとかで……、僕たちは、各テストをやらされた。

僕は小学校の頃からやっていたから、みんなより抜群にうまく出来たんだ。

ひょっとすると先輩たちよりうまかつたかもしれない……。

僕は喜んだ。

でも……やっぱりそれを快く思わない先輩もいた。

その先輩たち何人かに取り囮まれて……友達と思っていた同級生も敵になつた。

やっぱり、先輩には敵わなかつたんだろうね。

「もう、来るな。お前がいると、俺たちも試合に出れなくなる!」

と、そう言われて……。

それ以降、部活に行つてない……。

怖いんだよ。部活だけじゃなくて……僕の日常生活が壊れていくのが……。

それでも、やっぱり変わつていった。

僕はクラスでも一人になつてしまつたんだ。

それは君も知つていいるよね。

そこまで一気に話しあつた。

僕は緩やかな開放感とともに、これで彼女がどう思つのか心配になつた。

すると、ゆっくつと彼女の口が動いた。

「それは、可愛うだね…。でも、君だつて何からも逃げているんだよ? そのままじや変われないよ、何も。」

強い風が僕らを揺らした。

「なんだよ! お前に何が分かるってんだよ! 僕だつて努力したよ…!

「それでも…!」

僕は、怒鳴つてしまつた。自分のした事に気づき彼女に謝ろうとしたとき、そこにもう良子さんの影はなかつた。

その後のことはよく覚えていない。

普通に授業を受けて家までまつすぐ帰つた。

途中、静香が声をかけてきた気がしたが、全然反応も出来なかつた。

ただ、自分のしたことを悔いていた。

次の日の学校に彼女の姿はなかつた。風邪を引いたらしく謝ることも出来ない。

クラスのやつらがちよつかいをかけてきたり、ふざけて殴りかかつたりしたが、全く何も感じなかつた。

それでも昼休みに静香が来てくれたときは、少し嬉しかつた。

「遼? 最近元気ないけど、どうしたん?」

「なんでもないよ、それより静香も元気?」

本当になんでもないよ、という口調で話した。

「うそ…うそでしょ? ? なんで、私に隠すの? 遼が嘘をついてるかどうかなんか見れば分かるよ…、何年の付き合いだと思つてる

の…? 「

せき立てるように詰められた。久しぶりに聞く静香の怒鳴った声に、僕は少し驚いた。

「だつて…、「ゴメン…。全部、話すよ…。」

僕は、部活のこと、クラスのこと、良子さんのこと…すべてを話した。

「ありがとう…、話してくれて…。」「ゴメンね。遼が苦しんでるのに気づいてあげられなくって…。それと…良子ちゃんの家に今日行ってみたら?お見舞いにでも…。」

静香が良子の話を出したのは意外だった。僕が一番話したくないことをだつたのに…。

「うん…、そうするよ!ありがとう。」

僕はそういう教室に戻つていった。

幼馴染もありがたいんだな。

「また、言えなかつた…。遼にアドバイスすることしか…。なんで気づいてくれないの?私のこの思い…。」

静香が一人遠くへいく遼を見てつぶやいた。

僕はその日、良子さんの家に行つた。

あんまり行つたことのないところだつたから、住所を聞いても分からなかつた。

それでも、周りの人聞いて何とか着くことが出来た。

良子さんの家は、なんだか懐かしい感じのする家だつた。

「よし…!」

僕は意を決して、家に入ることを決めた。

「失礼します。」

「あら、いらっしゃい。良子のお友達かしら?」

やさしい口調で話す、おばさんはとても好感の持てる人だつた。

「はい、あのー、良子さんはいますか?少し会いたいんですけど…。」

「2階にいるわ。今はすっかりよくなつてるから行つてあげて。きっと喜ぶわ。」

僕はその言葉を聞いて、階段を上がつていた。
心臓はドキドキしている。

「こんにちは。良子さん元気?」

ドアを開けて、先手必勝で話しかけた。

「あつ、遼くん? 来てくれたのね。嬉しい!」

良子さんは、一瞬戸惑いながらも笑顔で迎えてくれた。

それからはいろいろな話をした。

良子さんも、元気そうに僕と…、そして楽しそうに話してくれた。
それでも、病人なので大方の時間に帰ることにした。

「ねえ、今日は何ももつてこれなつたけど何か欲しいものある?」

「ハンバーグ…。あのハンバーグもう一回食べたいな!」

その答えに一瞬僕は戸惑つた。

「え? そんなものでいいの? それなら明日持つてくれるよ。」

「本当? 嬉しい…! 私、明日も念のために学校休むから持つてきてくれる?」

小さな少女のように話す彼女に、僕はあきれながらも心が躍つた。

「もちろん、同じ時間に来るね。」

僕はそう言い残して、良子さんの家を後にした。

明日のために帰つたらおいしいハンバーグ作らなくちゃな。
そつ思つ遼の体を夕焼けがきれいに染めていた。

最終話　トウインクル（前書き）

最終話になりました。

大体、自分が考えていたぐらいで終わられましたね。
後書きは別に書きますので、ご覧になつてください。

最終話　トウインクル

「よーしょー！」

「うん、うまく出来た。

これなら、きっと分かってもらえるよ。

だって、僕は彼女に心を許せることが出来た。
だから、きっと伝える。

‘本当の僕のキモチ’

もし、仮にそれが駄目でもそこに後悔はない。だって、自分に嘘はつけないから。

僕は翌朝、ゆっくりと学校に向かった。

急いでしょがないし、何より僕には…緊張感がある。

しかしそんな思いも簡単ではなかった。

学校では、更にいじめがエスカレートしてきた。

僕が最近無視していたからだ。

「おい、遼よう、最近元気じゃねえかよ。いいことあつたのか？」

「な、なんでもないよ。なんか用なのかよ。」

「あの女…。良子とできたのか？」

いかにも、意地悪く笑いそういうクラスメートに、僕は少し動搖した。

「なっ、何言つてるんだよ！そんなはずないだろ！」

僕は怒鳴ってしまった。「はっはーん、なるほどなるほど。そういうやあいつ昨日も学校休んでたよな？お前ら一人でなにかやってるんじゃないのか？」

」の言葉の僕はキレた。

「ふざけるな！良子さんを悪く言つた…」

「バキイ！鈍い音が響いた。

僕は一瞬意識がとんだ。

「俺にキレるなんていい度胸してんじゃん。それなりの覚悟はあるんだろうな？」

「ふらふらする…。でも誰かが上から僕を見下ろして何か言つている。

「殴るなら…殴ればいいだろ！今日は逃げないぞ！」

僕の心には良子さんの言葉が鳴っていた。

「な、なんだよ…。殴れって言われて殴れねえよ。俺が悪者みたいじゃねえか…！」

相手の顔は何故か、あせつっていた。

「かつつ…。」

「はあ…？」

「明日からは部活行くからな！先輩だつて恐くない…！」

僕には話すことしか出来なかつた。それでもしつかりと言葉は発していった。

「好きにすればいいだろ…！」

はき捨てるように聞こえた。

僕はその場に立つていた。

僕は変わつたんだ。もう逃げない…。だつてまだ、未来がある。これから、良子さんみたいな人に会うかもしれない。部活で何回も優勝するかもしれない。

僕は僕の未来をつかむ。

そして、僕は良子さんの家の前にいた。

ピンポーン…。

「はあーい。」

「こんにちは。遼です。」

僕の声は不思議と震えていた。

「あ、毎日悪いわねえ…。2階にいるわ。」

さて…、僕は玄関の扉を開け、階段に足をかけた。
もう、迷いも距離もない。

「こんにちは、元気?」

「あ、遼くん! わざわざ来てってくれてありがとうございます!」
にこりと笑う。本当に可愛いな…。

「ハンバーグ焼いてきたよ! 食べてみて!」

「うんっ! 嬉しい!」

すると彼女は、パクリと食べた。

彼女は笑った。

そして涙を流したのだ。

「え? どうしたの? まずかった?」

僕はあわてた。塩を砂糖を間違えたかなとも思った。

「遼…ハンバーグおいしいよ、ありがとう。私と同じ味…。
え?」

私と同じ…?

遼つて…?

「え、どうにつけ…」

そこまで言葉が出てきてハッとした。

よしこさん? 良子さん?

もしかして…、りょうこさん…!?

それって…、おかあさん?

僕の頭は真っ白だった。

「そうよ…、私の名前はりょうこ…。苗字は変えてあるけどね。少しの間にこの現実世界に来てたのよ…。ゴメンね…。母さんは知ってる。あんたの本当の気持ちも…。騙してたわけじゃないのよ。だって、ばれると…。」

母さんの体が消えかかっている。

「母さん!? 体が…。」

「そろそろ、お別れみたいね……。ばれちゃったし……。」

母さんの目からは涙が流れていった。

僕も目頭が熱くなってきた。

お別れ？

何で？

「そんな、嫌だよ！お別れなんて……！それに僕は……！」

「そ、その先は言っちゃ駄目よ。」めんなさいね。もう一度だけあなたと会つてみたかったの……。でも、その思いはだんだん変わっていったわ……。私、三波 よしこは、あなたを……。」

僕はさえぎつた。

「その先は言っちゃ駄目なんでしょう？」

僕も目から涙がこぼれた。

「ふふ、そうね……。もうそろそろ時間だわ……。遼……いや、遼くん今までありがとうございました。」

「かあ、いや、よしこさん！駄目だよ、いなくなっちゃ……。僕また一人だよ……。」

そういう僕のよしこさんは、優しくさせやいた。

「大丈夫よ……。あなたは誰よりもやさしくて純粋な心を持つてる。幸せかどうかなんて、人にわかるもんじゃないのよ。それなら、自分は幸せなんだと思つて生きなさい。それが一番すばらしいことなのよ……。」

ふつ……。

僕は目の前が真っ白になつた。

気がつくと僕は良子さんの家があつた場所にいた。空が輝いていた。それは、太陽の光などではない。きっとこれは良子さんが残してくれたもの。僕の行き場を指し示す希望の道。でも、それは自分の足で歩いてゆかなくちゃ。

でもそこに家はなくただの空き地だった。もともと家などなかつたのだ。

目の前にはハンバーグを入れた弁当箱。

僕の心は、澄んでいた。

もう、何も怖くなかったし、すべてを受け入れられる。

「今なら言つてもいいよね…？母さん、いや、よしこさん？」

僕はそつとささやいた。

「好き…だよ。」

初めての恋愛小説を書かせていただきました。

どこが恋愛？と思われる方もいるでしょう。

今回は自分の腕が、あまりにも未熟でした。

しかし、自分で書ききつた以上掲載することを決めました。

やはり初期の作品は、今後の自分のためになりますしね。

各登場人物のキャラ性もはっきり書くことが出来なかつたし、遅についても掘り下げて書くことが出来なかつたのは悔しいです。

もっと、学校やクラブのことも書きたかつたですしね。

それと、静香との関係が中途半端になつたこと…。これは読者の皆

様の想像によつて完成されるもの一番の要素かな。

創造を膨らませて、自分だけの物語を作つてください。

それでも、最終回まで持つていけたことは嬉しいです。

しかし、これを作品と呼ぶには酷いと思います。

自分でも分かります。でも、「余話だけで進む小説もビミ」を書く

ことは防げたので、最低限のことはやれたかな…と。

関係ない話ですが、

今後の予定は、まず今田次の完結が目標です。

大体の指針は決まつてますので、そんなに時間はかかるないでしょ
う。

あちらはファンタジーといつひじで、こちらとは一味違つたものが
感じられると思います。

またその後の思いつく限り作品を出して生きたいと思います。

以上、トウインクル～輝ける空～でした。

この作品に田を通してくださいた事を心から、感謝いたします。
この作品を読んで、心に響くものがあればいいなと思います。

今後もよろしくお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5958a/>

トゥインクル～輝ける空に～

2010年10月28日07時56分発行